

板碑に刻まれた歴史

中世の小川町と板碑の造立

板碑とは、中世の東国で流行した石製の塔婆で、地域社会の有力者によって、死者の冥福などを祈って造立された供養塔である。小川町には、緑泥片岩を加工した下里・青山板碑製作遺跡があり、板碑を生産した拠点として知られている。それらの板碑は、槻川などの水運を通じて各地に運ばれたが、そのお膝元である小川町にも多数の板碑が残っている。小川町の一帯は、板碑を史料として歴史を復元できる地域といっても過言ではないだろう。そこで、下里・青山板碑製作遺跡の周辺にある板碑に注目しながら、鎌倉末期から南北朝期に至る政治情勢を探ってみたい。

(光明真言) 正中式季 ^丑 閏正月廿一日 (光明真言) 白 (光明真言) 貞和二年 ^丙 九月十六日比丘尼道阿 (光明真言)	(光明真言) 沙弥円阿 敬
---	---------------------

円城寺の双式板碑

円城寺(小川町青山)には、鎌倉末期の双式板碑が存在している。中央や右側の銘文によれば、正中2年(1325)閏正月に死去した「沙弥円阿」のために造立されたと推定される。そして、貞和2年(1346)9月、「比丘尼道阿」が死去したので、左側に銘文が追刻されたのだろう。こうした双式板碑は、夫婦で造立されることが多いので、円阿と道阿は夫婦だったと考えられる。夫の円阿は鎌倉末期に没したが、妻の道阿は南北朝期に他界して、改めて供養が営まれたらしい。元弘3年(1333)、鎌倉幕府は滅亡したが、この一族は政治的な勢力を維持していたことになる。このように、円阿や道阿の子孫たちは、元弘の乱を乗り越えて、南北朝期にも存続していったのである。

大聖寺の六角塔婆

大聖寺(小川町下里)には、六枚の板碑を組み合わせた南北朝期の六角塔婆が存在している。

大式頼円 道戒 道阿 慶有	円有慶義 良覚 最智 慶有	妙教 心性 契心 全徳	実阿道基 道日 妙義 新阿 全徳	一結之諸衆 敬白 永範 康永三年 ^甲 三月十七日 宗吉	道日 光守 景弘 末守	光吉守吉 守重 常吉	浄心 光未 守 善阿 德行 四信 実心	開山希融 平貞義 祐仙 奉読誦法花經一千部供養 檀那最阿契昌 是観	(史料) 大聖寺 六角塔婆
------------------------	------------------------	----------------------	------------------------------	--	----------------------	------------------	---------------------------------------	--	---------------

康永3年(1344)3月、大聖寺の開山である希融や貞義らが中心となって、法華經一千部を誦したという。多くの人物が結縁して名を刻んでおり、周辺地域の人々を巻き込んで、大規模な供養が催されたと考えられる。なお、末尾に記された「道阿」は、円城寺の双式板碑を造立した道阿と同一人物だろう。また、この六角塔婆には、同年10月に造立された板碑が伴っており、銘文から十三回忌供養のために造立されたことが読みとれる。それを逆算すれば、元弘2年(1332)の死者を弔ったことになり、元弘の乱による犠牲者を供養する板碑だったと推察される。とすれば、同時期に造立された六角塔婆についても、元弘の乱による戦没者を慰霊する意図が込められていた可能性が高いだろう。このように、大聖寺の板碑や六角塔婆は、この地域を押さえていた勢力が、鎌倉末期に起きた動乱によって、甚大な人的被害を受けたことを暗示しているのである。

小川町の板碑と中世の政治情勢

以上、下里・青山板碑製作遺跡の周辺にある板碑から、鎌倉末期から南北朝期に至る政治情勢の一端を探ってみた。鎌倉幕府を転覆させた元弘の乱は、政治的な勢力図を塗り替えた事件であり、地域社会の秩序を再編させる重大な転換点だった。小川町の地に残された板碑は、こうした影響が武蔵国に波及したことを物語る貴重な証人でもあったのである。